

「傷逝」とイプセンの問題劇

——「幽霊」を中心する

陳 玲玲

1、はじめに

魯迅の短編「傷逝」(1925)はイプセン劇と関係がある。エリサベス・エイデは「ここで、イプセンからの影響は明示的であり、彼への言及と、その短編小説の全精神との両方に見られる。イプセンがノラを残したところで魯迅は着手する。」¹と指摘している。また「傷逝」は魯迅の有名な講演「ノラは家出してからどうなったか」(1923)と呼応する作品だと思われる。いうまでもなく、魯迅は「傷逝」の中で中国のノラたちの運命を考えていた。ただし、もっと深い関係が、「傷逝」とイプセンの「幽霊」(1881)の間にあると思われる。本論は「傷逝」と「幽霊」とを比較して、魯迅におけるイプセンからの影響を追究したいと思う。

1919年11月、魯迅は雑文「われわれは今日どのように父親になるか」の中でイプセンの「幽霊」に論及している。「幽霊」の中の遺伝の恐ろしさが魯迅によって注目されている。魯迅も当時の知識人と同じように、イプセンの提出した問題を重く見ていたのであろう。魯迅ひとりだけでなく、当時の知識人はイプセン劇に対して、啓蒙の素材としての有用さに関心を持っていた。しかし、さらに、魯迅はイプセンの芸術的才能を視野に入れていた。芸術性という視点から、「傷逝」と「幽霊」との対比を注意深く考えた場合、この二作の共通点を浮かび上がせることが可能であると思われる。

¹ Elisabeth Eide *China's Ibsen From Ibsen to Ibsenism* London : Curzon (1987) p.116
Here the influence from Ibsen is explicit, both in the reference to him, and in the whole spirit of the short story. Lu Xun takes up where Ibsen left Nora.

陳 玲玲

2、「傷逝」

「傷逝」は難解な作品である。これまで「傷逝」論は少なくなく、この作品のテーマは「難解」、「不分明」だと言われた。² 実際には、「傷逝」は「始乱終棄」³という中国の戯曲や章回体小説などによく表現されたひとつの文学モチーフ(motif)を用いている。「傷逝」の内容について、簡単に言うと、涓生は個性解放という啓蒙を借りて、子君の心を捕らえ、しかし熱が冷めて子君を振ってしまう。子君は父親によって実家に連れ帰され、まもなく死んだ、というものである。確かに、この物語はきわめて現実的な意義を持っている。魯迅は、現実が残酷な世界だという認識を中国のノラたちに教えた。また涓生のような啓蒙者は根強い封建勢力に対しては、無力というより、むしろ虚偽的だと思われる。「傷逝」という作品のうわべは恋愛の自由・男女平等など時代のトピックを素材に書かれた。しかしその奥底で中国伝統文化批判が流れている。これは歴史の回想と分析を通じて、読み取ることができる。

「始乱終棄」型の小説を遡ると、唐代の元稹の「鶯々伝」がある。これは「始乱終棄」の最初のものであろう。魯迅は『中国小説史略』の中で次のように論じている。

元稹は、張という人物にかこつけて、彼自身が実際に経験したことを述べた

² 丸山昇「『傷逝』札記」、『中哲文学会報』第6号(1981)

「この作品の独自性、難しさは、自由恋愛・男女平等など時代のトピックであったこの時代に、このような設定で描かれた作品でありながら、作品のテーマが、愛の謳歌ではもちろんなく、さらに解放後の中国の一部の論者がいうように、彼らの愛が盲目的で社会的広がりを持たないことの批判にあるのでもなく、愛そのものへの懐疑にあったところにある。」

北岡正子「虚言世界への『イニシエーション』—『傷逝』の物語内容」、『お茶の水女子大学中国文学会報』第6号(1987)

「『難解』『不分明』を解き明かそうとする試みを以て書かれた論文には、内外の『傷逝』論の論旨を整理して論者の視点を定める、作者魯迅の伝記的事実を作品成立の背景に据える、作品内容を論者の読みとして再構成する、『傷逝』と同時代に書かれた魯迅の他の作品との構造上の共通性を視野に入れる等、その工夫・立論に興味深いものがある。」

³ 『中国成語辞典』(牛島徳次編 東方書店(1994))によれば、次のように解釈している。
「始乱終棄 はじめみだし、ついにすつ。まずもてあそび、その後捨てる。乱はもてあそぶ。婦女をもてあそんで捨て去る。人を利用した後捨て去る。元稹『鶯々伝』始乱之、終棄之、固其宜矣。はじめもてあそんで、最後に捨てるのも、もともとやむをえない。」
(pp.455-456)

のである。上乘の文章ではないにも拘らず、しばしば、情趣がゆたかで、なるほど観賞に値するが、篇末は非を飾って正当化したので、悪趣味におちてしまった。⁴

興味深いのは、元稹が亡妻を弔うために書いた「遣悲懷三首」と「傷逝」の内容と妙に重なる部分があるということである。元稹詩の一と二は次のようである。⁵

三たび悲懷を遣る 其の一
 謝公最小偏憐女 謝公の最小偏憐の女
 自嫁黔婁百事乖 黔婁に嫁して自り 百事乖う
 顧我無衣搜蠹篋 我の衣無きを顧て 蠹篋を捜す
 泥他沽酒拔金釵 他に酒を沽うを泥りて 金釵を抜かしむ
 野蔬充膳甘長藿 野蔬 膳を充たして 長藿を甘しとす
 落葉添薪仰古槐 落葉 薪を添えんとして 古槐を仰ぐ
 今日俸錢過十萬 今日 俸錢 十萬を過ぐ
 與君營奠復營齋 君が與に奠を營み 復た齋を營む

三たび悲懷を遣る 其の二
 昔日戲言身後意 昔日 戯れに言う身後の意
 今朝都到眼前來 今朝 皆 眼前に到り來る
 衣裳已施行看盡 衣裳 已に施して行くゆく盡くるを看ん
 鍼線猶存未忍開 鍼線 猶お存するも未だ開くに忍びず
 尚想舊情憐婢僕 尚お想う 舊情の婢僕を憐れみしを
 也曾因夢送錢財 也た曾て夢に因りて錢財を送る
 誠知此恨人人有 誠に知る 此の恨み 人人に有るも
 貧賤夫妻百事哀 貧賤の夫妻は 百事に哀し

其の一に、金釵と古槐は、「傷逝」の中で、子君の金の指輪と耳輪、および涓生の住んでいる会館の庭の古槐に変身したのであろうか。其の二に、針仕事は子君の料理を作ること、および去り際に涓生に残した全部の生活資料、を連想させる。また「貧賤の夫妻は百事に哀し」という慨嘆は涓生も同感だったと言ってもいい。

⁴ 『魯迅全集』第11巻、学習研究社(1986) p.155

⁵ 野口一雄『中国古典詩聚花 女性と恋愛』小学館(1984) pp.234-240

陳 玲玲

涓生の手記と、元稹の詩と、ならびに詩人元稹の経験、⁶ をつきあわせてみるならば、涓生は元稹と似た人間であると思われる。

もっと興味深いのは、涓生の苗字は史である。史涓生の名前は歴史の細流から生まれた、あるいは、歴史の中で細流のように生きている、という意味を含んでいると思う。⁷ この苗字は全文の中でただ1回しか現れない。⁸ 副題の「涓生の手記」が無くても、あるいは、「或る青年の手記」と変えても、全文の内容への影響が少ないと言える。また、涓生の「生」は昔、読書人、書生を指し、中国の旧小説の中でよく使ったものである。たとえば、元稹の「鶯々伝」の主人公の張生は、張という(名字の)書生である。主人公涓生が歴史との関係を持つことを暗示するように史涓生という名前を作った、と推測できる。

このような点から言うと、涓生は中国伝統の古い意識の持ち主を、本質的に代表していると言える。伝統的な彼らは女性を尊敬するという意識を持っていない。彼らは儒家の道德観念によって、堂々たる社稷の重みのみを思い、享楽を求める生き方を一切拒否している。そして、功利のために彼らは愛情を重視せず、婚姻を官途昇進の目的に服従させて、家庭が足手まといにならないようにする。さらに、精神的優越感を抱き、女性の価値、および日常生活の価値を認めない。しかし、表面上から見て、涓生は家庭の専制、古い習慣を打破し、個性の自由、男女平等を追求しようとした啓蒙者のようだと思われる。実は、彼は旧思想の束縛から抜けきっていなかった。涓生が彼女にすがって、閑寂と空虚から逃げ出したいという心理は、健康な恋愛ではない。これは多少に古い文人の「狎妓」⁹ 文化の心理があると思われる。また、子君が花を好まず、動物を好むことについては、涓生は皮肉を言った。中国の士大夫は植物が好きで、動物を軽蔑している。淑やかで、

⁶ 小川環樹編『唐代の詩人——その伝記』大修館書店(1975) p.449

「元稹は、貞元19年に、当時京兆尹であった(後に太子少保)韋夏卿の末娘韋叢と結婚している。また、結婚に先だって、(貞元17年頃か)艶詩(主に『才調集』所収のもの)にうたわれ、伝奇小説『鶯々伝』のモデルとなった、と推量される——女性(双文、あるいは鶯々)との恋愛を経験している。」

⁷ 金築由紀「悲恋物語に見る 彷徨者の姿」、『しにか』第11号(1996)

「涓の字には、小さい流れ、清からなさま、選択する、などの意味がある。従って『涓生』は生命の細い流れであり、清からな生命であり、生命あるいは生活を選ぶ者であるということができよう。」

⁸ 局長諭示 史涓生は爾後出仕勤務に及ばず

⁹ 芸者をあげて遊ぶ。

思いやりがある、という涓生の女性観は、伝統的である。そして、涓生は家事に骨を折る子君に対して、興味をなくしてしまった。さらに、解雇後の苦境の原因を子君のためだと思うようになる。ついに、彼は「中国の現実から遊離して独り歩きをする近代の恋愛観に安易に寄り掛」って、「愛を喪失した故に、二人とも滅亡を避けるために、離別もやむを得ないとする」、「中国旧社会では極めて軽率で卑劣な行為」を行う。¹⁰ これは元稹の「始乱終棄」と同じであろう。丸山昇氏は、「涓生は、そんな魯迅が、現実との格闘の意味をたしかめるべく、愛の失格者、理想の敗北者として創造した人物であった。」と指摘している。¹¹ 確かに、涓生は愛の失格者、理想の敗北者である。しかし、涓生は現実よりむしろ、旧文化のほうに負けた。すなわち、現実と比べて、自身の因襲する旧文化から抜けきれていないことが、原因である。

さて、子君という名前は、魯迅のほかの作品の中における女性の名前、たとえば順姑、愛姑、阿長、阿金、祥林嫂、単四嫂、柳媽、呉媽などと、雰囲気が違うところがある。「君」という名前とつけられた女性といえば、卓文君、王昭君、李香君、孟麗君など、反抗意識を持つすぐれた女性を思い出す。「子」は、中国において殆ど女性の名前につけられることがない。しかし、日本では女性の名に添える語である。子君は子君という名の如く、子供のように天真爛漫で、積極的に恋愛を追求する日本の女性のような女性である。愛情の中で、子君は正堂堂として、罪と不潔な感じがなかった。子君と比べて、涓生は自分の恋愛中の行為に対して、「滑稽」むしろ「愚劣」だ、と考えることから、中国の伝統文化の中で抑圧された恋愛観がうかがえる。だからこそ、「恋愛の自由」と「離婚の自由」という近代の恋愛観は涓生にとって、彼が「始乱終棄」を行う口実にすぎないのではないか。

子君の吉兆胡同における生活は、隠喩的な意味がある。それは、命を生み、命を育て、命を守るなど、母性のようなものを意味する。吉兆胡同の中で小役人の細君が誕生前の女の子を育てるのも、女性の母親としての価値を暗示している。涓生の失業が子君に衝撃をあたえたと言うより、もっと辛いことは、子君は自分が命を育て、守ることができなかったという現実を理解したことである。また、涓生の愛を失った子君は父に連れ戻されるとき、去り際になお、後に残る涓生の生活に配慮をしていた。このことは「母性」に昇華された価値を示す。しかし、涓

¹⁰ 中井政喜「魯迅『傷逝』に関する覚え書」、『言語文化論集』第9巻第1号(1987)

¹¹ 丸山昇「『傷逝』札記」、『中哲文学会報』第6号(1981)

陳 玲玲

生は子君の痛苦、子君の母性、に思っていたらなかった。むしろ様々に子君の見識が浅はかになったと思った。涓生は命に対する尊敬の念を持たないし、彼は自己中心で、本当の愛が分からない。子君に対する現実離れした理想を抱いて、基本的な尊重、思いやりさえもなかった。子君は、いわゆる新しい女性ではないが、ごく自然な、天性を備えている女性であると思われる。¹² このような女性は中国の伝統社会内で、立脚地がないのだろうと想像できる。しかし、子君は直接的に中国の伝統社会に負けたのではなく、負けたのは、自分の愛している涓生によってである。これは、涓生の啓蒙には内在的な虚偽性があることを示す。

3、「幽霊」

「幽霊」はギリシア悲劇の原型にのっとなっている。Brian Johnston は論文「『幽霊』の中での原型重複」¹³ で、「幽霊」は主題と情景において「オレスティア」「オイディプス王」と「バッカス」から精華を取り入れたと指摘している。また、「幽霊」の内容について、次のように述べている。

- 1、個体意識と伝統的社会的構造との闘争(アルヴィング夫人と息子オスヴァル)
- 2、家庭内部における夫妻、親子、兄弟の間での、関係の衝突
- 3、「陸軍大尉アルヴィングの孤児院」と「侍従アルヴィングの家」との区別、オスヴァルが持っているパリ人の価値観とマンデルスの正統思想との対抗、および啓蒙知識と伝統的常規との衝突、なお、その社会と文化界
- 4、マンデルスの規範に従う精神信仰と、アルヴィング夫人の自分の信仰する伝統的な律令の有効性を反省するときの、その孤独な精神追求との間における、形而上学的な区別¹⁴

¹² 魯迅は「小雑感」(『而已集』前出『魯迅全集』第5巻、p.145)なかで、「女の天性の中には母性と少女性がある。妻性はない。妻性はむりにつくられるもの、母性と少女性の混合でしかない。」と書いている。これによれば、子君は自然な女性である。恋愛するとき、少女性がたっぷり表れている。同棲してから、母性が、たまに少女性が混ざって、表れている。妻性が少ない感じである。

¹³ Brian Johnston(米国)「『群鬼』中的原型重複」、王寧 孫建編『易ト生与中国——走向一種美学建構』天津人民出版社(2004)

¹⁴ 前出『易ト生与中国——走向一種美学建構』pp.23-24

アルヴィング夫人は愛のない結婚を否定しつつも、因襲的な観念に縛られて放縦な夫のもとに留まり、可愛い一人息子オスヴァルを文化的先進国パリへ遊学させる。彼女は家名を守るため偽善に終始する。夫の偽りの名誉を讃える記念式典を前にオスヴァルが帰ってくるが、因襲の幽霊がふたたび夫人の前に現れる。息子オスヴァルは遺伝梅毒のせいで、父のようにシャンパンにおぼれ、放縦に身を任せ、死に瀕している。

一般的に読者は、アルヴィング夫人に同情し、彼女が犠牲者だと思う。しかし、アルヴィング夫人は息子オスヴァルのパリから持ち帰った「生きる喜び」¹⁵ という価値観を受け入れ、より深い反省をする。¹⁶ 彼女は自分が因襲的な観念に縛られていたこと、さらにこのような観念によって、夫の「生きる喜び」を奪ったという事実を理解した。この点については、アルヴィング夫人の牧師への話と、息子への話と比べると、明らかになる。¹⁷

イブセンの批判の矛先は基督教を中心とする文化に向いていた。表面上では、幽霊は死んだアルヴィングを指す。しかし実際には、いたるところに幽霊が多い。アルヴィング夫人は次のように指摘している。

幽霊。さっきも、レギーネとオスヴァルがあちらで何か言っているのを耳に

¹⁵ 「生きているというだけで、そりゃすばらしいことなんだって。母さん、母さんは僕の描く絵が、どうしてみんな、この生活の喜びをテーマにしているのか、考えたことがありますか？いつも、そして例外なく、この生活の喜びなんだ。光線、日光、陽気な空気、——それに晴々とした幸福な顔の群れ。」オスヴァルは言った。(原千代海訳『幽霊』岩波文庫(1996) p.118)

¹⁶ 「お前、さっき、生きる喜びがどうだとか話してたわね、——それで不意にわかったような気がしたのよ、いままでのわたしの生活、——何もかもが、新しい光にぱっと照らし出されて。」とアルヴィング夫人は息子オスヴァルに話した。(前出『幽霊』 p.134)

¹⁷ 「主人はそれこそ、放蕩者のままで亡くなりましたのよ、それまでもずっとそうだったように。」とアルヴィング夫人は牧師に話した。(前出『幽霊』 p.59)
「お前が知っていたらね、若い中尉でいらしたところのお父さまを。生きる喜びで、それこそピチピチしてらした。[中略]ひと目お会いするだけで、こちらも陽気になったものよ。本当に元気で、生氣にあふれていらした！[中略]わたしだって、そう楽しみを、この家に持ってきたとは言えないわ。[中略]すべてが義務に結びつくの、最後には、——わたしの義務だとか、あの人の義務だとか——。だから、お母さんかもしれないのよね、オスヴァル、家がさっぱり面白くない、そういう気持ちにお父さまをさせたのは。」とアルヴィング夫人は息子オスヴァルに話した。(前出『幽霊』 pp.135-136)

陳 玲玲

して、まるで幽霊に出会ったようなおもいが、わたし、したんですの。それにどうも、そういう気がしましてね、われわれはみんな幽霊じゃないかって、先生、わたしたち一人一人が。わたしたちには取りついているんですよ、父親や母親から遺伝したものが。でも、それだけじゃありませんわ、あらゆる種類の滅び去った古い思想、さまざまな、滅び去った古い信仰、そういうものも、わたしたちにはとりついていますね。そういうものが、わたしたちの中には現に生きているわけではなく、ただそこにしがみついているだけなのに、それがわたしたちに追っ払えないんですもの。ちょっと新聞を取り上げても、その行間に幽霊が忍び込んでいるような気がしましてね。きっと、国中に幽霊がいるんですわ、海の砂ほどいっぱい。それにみんな、わたしたち、光をひどく怖がっていますものね。(原千代海訳『幽霊』岩波文庫(1996) pp.80-81)

それでは、アルヴィング夫人だけではなく、みんな幽霊に操られていることになる。故アルヴィングは本来は愉快で、活力にあふれた人だった。しかしいわゆるそれぞれの義務、実は幽霊に、生きる喜びを奪われてしまい、ほとんど軟禁状態になったので、彼は反発して、放蕩者になった。アルヴィング夫人に引き取って育てられている、小間使いが生んだアルヴィングの私生児レギーネは、精神面が健全とは言えない。息子オスヴァルは才能を持つが、しかし体が弱いので、だめな人間になっている。また、彼は母の手紙から得た模範的な父を信じ、自分の病気が自業自得だと思っている。彼は殆ど父と一緒に生活したことがなく、悪い影響を受けていない、しかし父のように放縦にしている。これは精神の遺伝によるのであろうか。またレギーネは真相を知って、実の母のように、花柳の巷に落ち込もうとしている。アルヴィングの二人の子供における欠陥は、霊と肉との間での分裂状態を象徴し、道徳至上のヴィクトリア時代において「霊肉」の分裂している特徴を、また 19 世紀の「詩人」や「芸術家」の衰退を暗示する。¹⁸

アルヴィング夫人、およびアルヴィングの二人の子供の悲劇は、幽霊のアルヴィングと直接の関係がある。彼らと比べて、マンデルス牧師とエングストラン指物師は、幽霊のアルヴィングからうまい汁を吸い、現実世界での生きている幽霊を代表すると思う。言うまでもなく、マンデルス牧師はアルヴィング夫人のいっ

¹⁸ 前出『易ト生与中国——走向一種美学建構』p.28

た「滅び去った古い」思想、信仰の擁護者、執行者であり、人間の生きる喜びを奪い、幽霊のような存在である。エングストラン指物師は、お金のために小間使いヨハンナと結婚し、放火で孤児院を全焼させて、その罪をマンデルスになすりつけて、マンデルスから海員ホーム(遊女家)を造る資金援助をせしめようとし、また父の名義でレギーネが遊女になることを勧めた。このような人間が自由自在に生きるのは、現実の社会が幽霊の世界であるからであろう。

「幽霊」は、表面上で、梅毒が家庭に悲劇をもたらし、社会に問題を起こしたことを書いている。しかし深層では、梅毒がただ道德の、医学の課題だけでなく、それは文化に根を持っていることを明らかにした。Brian Johnston は「『幽霊』」の中では、ヨーロッパにおける異教徒と基督教の二つ伝統的精神遺産が崩壊してしまったことが表現される」、と指摘している。¹⁹

4. 「傷逝」と「幽霊」

「傷逝」と「幽霊」の二作は、現実の社会問題を提出しただけではなく、問題のうらにある文化的根源を探ろうとする点において、共通の主題があるように思われる。イプセンは「幽霊」についての創作ノートの中で、次のように述べている。

主調音は、当然、こうなる。——文学、芸術等等におけるわれわれの教養の華麗な花——そして、それとは対照的な、誤った道にいる全人類。²⁰

イプセンはヨーロッパにおける文化危機に対して先覚的に意識していた。彼は「幽霊」の中でアルヴィング家族の悲劇を通じて、みんながどうしても運命によって、実は精神文化によって定まっている災難を、免れることができない、という状況をそれとなく示した。同工異曲として魯迅は、恋愛の自由、ノラの家出という時代のトピックを、「始乱終棄」の古い枠組みに入れて、「傷逝」を書いた。「傷逝」のなかで、悲劇的な結末が、啓蒙の産物ではなく、伝統文化による先天的欠陥に原因のあることを明らかにした。精神の革命が、人類の前で一番大きな問題だという考えは、魯迅とイプセンに共通している。これはイプセンの魯迅への主な影響である。というよりむしろ、魯迅は社会問題の認識のさいに、イプセンと精神

¹⁹ 前出『易ト生与中国——走向一種美学建構』p.47

²⁰ 前出『幽霊』p.156

陳 玲玲

的氣質が近かったため、と思われる。

また、「傷逝」は「幽霊」に似ているところが少なくないと言える。とりわけ涓生とアルヴィング夫人の間に、相似が見られる。

1、涓生とアルヴィング夫人は、それぞれのプロットの中で、語り手を担当している。「傷逝」は、涓生の手記であり、子君の死後において、涓生から話された。「幽霊」では、主な主人公主人のアルヴィングが劇のなかで登場しない。アルヴィングの十回忌の前日、アルヴィングのことはアルヴィング夫人からマンデルス牧師と息子オスヴァルに話される。違うところは、「傷逝」は手記なので、傾聴者がなく、全部涓生の独白であり、他方「幽霊」は一人芝居ではなく、アルヴィング夫人の話に、具体的な傾聴者がいる、という点である。また、作者魯迅はイプセンのような局外者²¹ではなく、自分の主張と語り手の涓生の叙述を入り交じらせ、「傷逝」の難読さを高めた、という点もある。

2、涓生とアルヴィング夫人は、事態展開をリードしている。「傷逝」の中で、涓生は子君の運命を支配した。彼は子君の啓蒙の先生として、子君に封建家庭をかなぐり捨てるように、個性解放、男女平等を教えた。また彼の収入で同居生活を維持した。結局後に、彼は真実の気持ちを言って、子君の実家での死を招いたと言える。「幽霊」では、アルヴィング夫人は息子オスヴァルの啓蒙の先生ではないが、しかし彼女が息子をパリに行かせるのは、啓蒙の意味がある。だが、彼女は手紙でまったく反対の思想を伝えた。結局、彼女は真相を話して、息子に人生を絶望させた。そのため、涓生とアルヴィング夫人の啓蒙は虚言の部分を持って

²¹ 前出『幽霊』p.159

イプセンは「幽霊」について、スカンドルフに宛てた礼状の中で次のように書いている。「台詞の中で作者の顔が見えるのを、完全にふせいでいます。[中略]台詞の中に作者個人の意見を差しはさむほど、そういう印象の邪魔を効果的にするものはないでしょう。[中略]わたしのほかの戯曲には、作者がこうも局外者で、こうも完全に不在なのは一篇ありません。」

²² 丸山昇『「傷逝」札記』、『中哲文学会報』第6号(1981)

「この作品が難解だといわれるのも、登場人物としての涓生、それについて『悔恨と悲哀』の手記を書いている筆者としての涓生、そういう筆者を創作している作家魯迅、という三重四重の視点が、読者の中でもとすれば混同されがちにちがいない。」

中井政喜「魯迅『傷逝』に関する覚え書』、『言語文化論集』第9巻第1号(1987)

「涓生の発言と魯迅の主張には少なくとも次の様な類似点があり、[中略](1)旧社会において闘う生活者(夫婦)は手を携えて進まねばならぬこと。[中略](2)人生の第一義は生活であること。」

いた、と言える。それに、それらの虚言は啓蒙された者の悲劇に繋がっていると思う。

3、涓生とアルヴィング夫人は新旧二つの文化の産物だが、主に古い思想に束縛されている。また、彼らは悲劇の中で、懺悔によって、新しい人生の価値を見つけた。涓生のほうはまさしく啓蒙の言葉を話しながら、心に根ざした伝統的価値観に左右された。言うことと、することが裏腹なので、自分でも自分が不真実、卑怯者だと痛感した。他面、涓生が、子君の愛故に勇敢であったことについての思いは、愛の意味を発見していると言える。アルヴィング夫人の場合は前半生において、旧道徳を信じ、生きる喜びのない家庭を維持管理していた。そのため、夫に家庭が怖いと思わせた。しかしながら、彼女は息子をパリに行かせ、新しい思想運動とその関連の本を読んだりして、「幽霊」を発見し、「生きる喜び」を理解できるようになる。

4、涓生とアルヴィング夫人は、自分でも自分が「卑怯者」という考えにおいて同じである。アルヴィング夫人は息子に真実を言い出す勇気がなく、うそをついたので、卑怯であると考える。

隠してなんておこななければよかったです、アルヴィングがどんな生活をしていたか。あのころはほかにどうする勇気もなく、——それも一部は、わたし自身のためでしたけれどね。何て卑怯だったんでしょう！（前出『幽霊』 p.75）

——義務を果たしていたんですわ、世間の思惑を考えて、——だからあたし、あの子に嘘をついたんですわ、来る年来る年も。ああ、何という卑怯者、——何という卑怯者だったんでしょう！（前出 p.77）

涓生は真実を言ってしまった。しかしそれは真実の重荷を引き受けたくないためであり、それも卑怯である。

僕に虚偽という重荷を負う勇気がないばかりに、彼女に真実という重荷を押し付けてしまった。彼女は、僕を愛したばかりに、この重荷を負い、峻厳と冷眼に身をさらしながら、いわゆる人生の道を歩いていかなければならないのだ。

僕は彼女の死を思った……僕は、卑怯者であることがわかった。真実の人物であれ、虚偽の人物であれ、力を持った強者たちに排斥されて、当然な人

間である。(『魯迅全集』学習研究社(1986)第2巻 p.335)

5、啓蒙された子君とオスヴァルは、子供の特徴を失ってはず、新生の代表として啓蒙を受け、悲劇に陥った。魯迅はイプセンと同じように、いわゆる新思想に疑いを持ち、また、未来に楽観できないことをそれとなく示したと思う。

6、「傷逝」と「幽霊」の中で、場所は隠喩的な意味がある。「傷逝」の中で、「会館」「吉兆胡同」「図書館」が、それぞれ文化の隠喩を織り交ぜる。「図書館」は、精神の避難所である。涓生は現実の中で挫折して、図書館に逃げた。これは中国文人の軟弱性を表している。また、本はろくなものがなく、ストーヴが暖かくないような図書館の状況は、精神世界の衰退を暗示している。「吉兆胡同」も、極言すれば、避難所である。手記の始めのところで、「僕が子君を愛し、彼女のおかげで、この静寂と空虚を逃れ」た、と涓生は言った。「彼女」(「紅粉佳人」、若く美しい女性、陳注)は中国文人にとって、もう一つの避難所だと言える。しかし、涓生がこの二つの避難所から逃げ出したことは、旧文化の深刻な危機を表していると言える。「会館」は独身男性の住むところで、男性権力の社会の隠喩だと思う。²³「会館」は、涓生が男女平等、恋愛の自由を追求することを許さないに違いない。「会館」へ戻って、手記を書き、死んだ子君に懺悔しながら、弁解の言葉を飾る涓生は、男性権力の社会、および中国の伝統文化から抜け切ることができなかったと思われる。

一方、「幽霊」の中で、「陸軍大尉アルヴィング記念ホーム」(孤児院)と「侍従アルヴィングの家」(遊女屋)という二つのアルヴィングと名づけられた場所は、明らかに、「性」の意味を含んでいる。前者は私生児を連想させ、後者は性行為の場所である。それに、アルヴィング家の中では、生きる喜びがないために、大尉アルヴィングがヨハンナ(後に遊女、陳注)と私生児を作り、アルヴィング夫人が梅毒の遺伝のある息子を産んだ。基督教における禁欲と縦欲は、同じ問題の表と裏であり、縦欲は禁欲の結果である。

²³ 会館の研究者は、北京の会館を次のように分けている。1、北京で羈旅する同郷および科挙に参加する受験生に提供する住所。それは大小に拘りなく、中庭が一つ、あるいは、四つ五つある四合院であり、全て北京での同郷人の役人が私宅を譲りわたしたものである。2、祭祀、集會を主とするもので、また少数の同郷人における高位高官の人、富有な商人、有名人がしばらく留まるためのものである。この類の会館は規模が広く、戯楼と花園もある。3、祭祀と議事のための専用会館。大部分はある業界の会館と、会館の祠である。(顔菁『北京青年報』2002年11月20日)

「傷逝」とイブセンの問題劇

その他に、「傷逝」と「幽霊」における時間の処理が似ている。「傷逝」は、初春に開始し、終結したのは初春、ちょうど一年である。「幽霊」は、昼日中から、翌日の朝まで、だいたい一日である。

もう一つは、魯迅とイブセンが言葉の達人であり、地名や人名の細部にも手を施し、巧みに主旨を表現している。「傷逝」の中では、史涓生、子君、および阿随の名前から、作者の創意が見える。「幽霊」の中では、アルヴィング夫人が「ソルヴィグと称されている土地」(ソルヴィグは太陽(sol)の意味を含んでいる、陳注)と、その産業を譲渡したのは、彼女は太陽が象徴する明るい生命感をなくしたことをほのめかしている、と思われる。

5、おわりに

魯迅は日本における留学時代からイブセンを受容しはじめ、帰国して、五四運動時期イブセンブームにも影響を受けた。「傷逝」の中には、「幽霊」と似ているところがたくさんあるにも拘らず、ぎこちない模倣がないと言える。また、表面上では、「傷逝」は胡適の「終身大事」(『新青年』6巻3号、1919年3月)以来、もう一つの中国版の「人形の家」であり、ノラの運命を表現している作品である。しかし実際には、「傷逝」において、魯迅は自分の主題—「喫人」あるいは「食人」という主題を継続している。「自我の確立」「恋愛の自由」という新思想は旧中国において、進歩的合理的意義を持ち、反封建の思想的武器である。しかし、因襲された旧思想はこのような新思想の化粧を利用して、「喫人」し続ける。子君は食われてしまった。そして涓生も。しかし涓生は食われながら、自分も「喫人」していた。「傷逝」は、文化遺産、換言すれば精神的遺伝を負う人間の、「精神の革命」の難しさを示している。これは、イブセンの「大事なことは人間の精神の革命です。」(1868年1月12日16日付B・ビョルンソンへの手紙)という意識と共通している。イブセンと同じように、魯迅は中国人の心の中における〈幽霊〉を捕らえようとしたと思う。それ故「傷逝」は中国においてイブセンの影響をうけつつも、独立して創作された優秀な作品となっている。